

無口な“患者”も…

診断ピタリ

あぐら

東大植物病院(東京都文京区)



診療は患者から始まる。アジサイを持ってきた山本課長の話を聞く白石さん



病気で緑しべが葉のように変化したアジサイ



顕微鏡で葉を撮影してDNAなどによる検査はないと確かめた

病気のアジサイから病部を採取する東京大学植物病院の植物医師、白石さん(東京都文京区)

同大の植物病院は農学部のキャンパスにあり、日本植物医学協会が認定した「植物医師」4人が診断に当たる。

診療日には、予約した依頼者が次々と来院する。宮城県から来た果樹産地推進課の山本課長は、「患者」のアジサイを持参。約3万本が咲き誇る美濃が有名な、同県美郷町推野集落の住民から託されたものだ。

同集落ではアジサイのがくや難しげが緑の葉のように変わる現象が起き、住民を悩ませていた。症状を聞いた植物医師の白石俊昌さん(64)は、顕微鏡も使ってアジサイを詳しく観察。同大が開発した簡便な診断キットで分析し、30分で細菌が原因のアジサイ葉化病と見極めた。

白石さんは病気の株の伐採や

農作物などに発生した判断が難しい病虫害を的確に診断し、対策を手助けする「植物病院」が注目されている。農学部を持つ大学が設けたものなどがあり、農家らの「駆け込み寺」になっている。東京都文京区の東京大学植物病院で診療現場を見た。

+

+

同大は1906年に世界初の植物病理学講座(現在は研究室)を開設。植物医学研究室とともに学外から持ち込まれた植物の診断も引き受けてきた。2008年に診断と対策の迅速化を目指して日本初の植物病院を開院。同年に梅や桃などに大きな被害を及ぼすプラムボックスウィールスの国内初確認に関わるなど、重要な役割を果たしている。

大学の植物病院は他に吉備国際大学植物クリニックセンター(兵庫県南あわじ市)、法政大学植物医学センター(東京都小金井市)があり、今後増える見通しだ。

東大の院長を務める難波成任特任教授は「各病院が連携した、伝染病の大発生にも対応できる仕組みを整えたい。地元の問題を知る、地域に根差した植物医師を増やしてほしい」と展望する。(木村崇之)



判定のため紫外線を当てた検査用チューブ。*患者のもの(中央の二つ)は陽性を示す黄緑に発色した



診断キットで病原菌を検出するため検査用チューブに細菌と液体を入れる